

Title	形態素の結合用法（語構成）と自立用法（句構成）
Author(s)	Kim, Ju Young
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/33859
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

論文内容の要旨

氏名 (KIM JUYOUNG)

論文題名 形態素の結合用法（語構成）と自立用法（句構成）

論文内容の要旨

1. 本論文の目的

本論文は、新聞（『毎日新聞コーパス(1991～2006)』）に使われた外来語系語基を対象に、その結合用法（語構成）と自立用法（句構成）の量的実態を調査し、両者の関係を共時的・通時的に明らかにすることを目的として、その方法論の開発と理論化を試みた研究である。

一般に、形態素は自立用法の有無によって自立形式と結合形式に、さらに語基と接辞に細分されるとする従来の派生形態論では、語基か接辞かという問題は重要視されたが、同一語基の自立用法と結合用法との関係がいかにあるかという問題についてはあまり注目してこなかった。それは、語基の自立用法は文法論で、結合用法は語構成論で、というように、それぞれ別の部門として扱ってきたことと、自立用法の内実を、語基が単独で使われることであると単純化して、実際には(助辞などを伴った)「他の語との結合」を示すものだとは考えなかったことによる。これによって、語基の自立用法と結合用法とが同列におかれることはなかったのである。

語基の結合用法が他の語基と結合して複合語を作ることであるとしたら、同じく自立用法は助辞などをとめない他の語基と結合して語結合（句）を作ることであるといえる。つまり、語基は、文の中で結合するという同じ現象を通して、複合語の要素になったり、句(phrase)の要素になったりするわけである。このように考えれば、語基の結合用法と自立用法とは、それぞれ別次元の現象ではなく、両方とも語基の結合力の一面として関連づけることができ、形態素の結合論として同じ次元で扱うことができる。そうすることによって、語基による語構成と句構成とがどのような関係にあるのか、という研究課題が設定できるのである。

そこで、本論文では、従来の派生形態論の観点では同レベルで扱うことができなかった結合用法と自立用法とを、形態素の結合能力としてとらえ、両者を比較できる理論と方法論を構築して、両者の関係を明らかにすることを目的とする。具体的には、現代語で生産力を増している外来語系語基に注目し、その結合用法による他の語基との結合（語構成）をM(morphem)結合、自立用法による他の語基との結合（句構成）をW(word)結合と呼んで、両者の間にどのような関係があるのかを、実際の言語使用の中から実証的に記述していく。共時的には、外来語系語基のM結合とW結合との量的関係を明らかにし、両者の間に有意差がみられる主要な語基についてはさらに詳細な関係を追究する。通時的には、外来語系語基「メール」を例に、そのM結合とW結合との関係の経年的変化を調査し、その遷移パターンの発見を試みる。

2. 各章の内容と本研究の成果

序論では、本論文の目的と研究対象、調査資料、研究の方法について述べるとともに、予備調査で行った外来語調査について報告した。特に、従来の派生研究論とは異なる観点から、形態素による自立用法と結合用法を、語基の持つ同じ結合力の異なる側面としてとらえ、同列に並べて比較することを主張した。

第1章では、形態素（語基）の結合用法と自立用法との関係を、外来語系語基を対象として、主に量的な側面から調査・考察した。従来の派生形態論では、語基と接辞との区別の問題は重要視されたが、語基における結合用法と自立用法との関係については、語基の一般的な性質としても、個別の語基の特徴としても、詳しく検討されたことがない。その要因は、結合用法を「語基が他の語基や接辞と結合して合成語を構成すること」ととらえながら、自立用法については「語基がそのまま単語として使われること」とのみ規定し、「文中で他の単語と結合して句を構成する」という側面を考慮しなかったため、両者の関係を「いくつの異なる形態素と結合するか」という共通の観点から計測・比較することができなかったからである。そこで、本章では、結合用法を形態素による語構成、自立用法を形態素による句構成ととらえ、それぞれを「M結合」「W結合」と呼んで、両者の量的関係を、結合相手となる形態素の異なり語数で計測した。調査は、2006年の『毎日新聞』全紙面の記事本文に現れた外来語系語基上位50種を対象とし、

それらが漢語および外来語の語基と共起してつくるM結合・W結合を異なりでカウントし、両者の関係を、注目した外来語系語基が主要部になる場合と非主要部になる場合とに分けて、相関係数・共起語基の共通度・差異係数の三つの指標において検討した。その結果、非主要部用法では、M結合とW結合との間に強い正の相関関係が認められたが、主要部用法では明確な相関関係は認められなかった。結合相手の共通度も、非主要部用法の方が主要部用法より大きかった。また、非主要部用法ではW結合がM結合より多かったが、主要部用法ではその逆の結果となった。これらのことから、対象とした外来語系語基は、非主要部になる場合には、M結合とW結合との間に構文的な語形成の傾向、主要部になる場合には命名的な語形成の傾向をもつことが推測される。今後、個別の語基についてM結合とW結合との関係を分析し、こうした推測を検証していく必要がある。

第2章では、第1章の調査結果のうち、非主要部・主要部の両方でM結合・W結合間に有意差が認められた以下の語基を対象に、それぞれの類型の特徴を明らかにした（*は動名詞語基）。

- 1) 非主要部・主要部の両方で、M結合>W結合

ワールド、リーグ、ホーム

- 2) 非主要部・主要部の両方で、M結合<W結合

アピール*、イメージ*、ケース、スタート*、テーマ、プレー*、リード*

- 3) 非主要部ではM結合<W結合、主要部ではM結合>W結合

カード、クラブ、グループ、サービス*、システム、チーム、ボール、メーカー、メンバー

1)の語基は、他の類型に比べてやや特殊な語基として考えられる。「ワールド」にはW結合がみあたらないが、これは漢語系語基「世界」の阻止による結果とみられる。「リーグ」のM結合には、見かけ上はW結合のようにみえる構文的複合語（リーグ制覇、リーグ連覇など）が安定的に使われている。「ホーム」は多義語として意味による違いがみられる。主要部では、M結合に〈施設〉（老人ホーム、有料ホームなど）、W結合に〈ホームグラウンド〉〈ホームベース〉（得意のホーム、同点のホームなど）という具合に、意味によってM結合とW結合の様相が異なる。

非主要部・主要部の両方でW結合が多い2)の類型は、「アピール」「イメージ」「スタート」「プレー」「リード」などサ変動詞となる動名詞語基がほとんどである。これらは非主要部でも主要部でもW結合になりやすく、M結合にはなりにくい。また、抽象名詞の「ケース」と「テーマ」は、節を受ける場合が多いためW結合が多いと考えられる。さらに、「ケース」は多義語で、抽象名詞と具体名詞で類型が異なる。抽象名詞の場合は、非主要部・主要部の両方でM結合よりW結合が多い2)の類型であるが、具体名詞の場合は、非主要部・主要部両方でW結合よりM結合が多い1)の類型になる。また、主要部「ケース」のM結合は、抽象名詞は構文的複合語、具体名詞は命名的複合語をつくる傾向がある。

非主要部ではW結合、主要部ではM結合が多い3)の類型は、「クラブ」「グループ」「チーム」「メーカー」「メンバー」のような組織、主体を表す語基が多く、主要部では名付け的で、M結合になりやすい。しかし非主要部ではこのような制限がなく、W結合が多くなる。「サービス」は動名詞語基であるが、動詞的要素としてM結合になることはほとんどなく、名詞としての用法ばかりである。「サービス」と「システム」は主要部になった場合、名付け的になり、上記の組織・主体の語基と様相が似ている。

第3章では、共時調査の結果、主要部用法でも非主要部用法でも共起語基の類似度が非常に高かった「メール」を対象に、『毎日新聞コーパス』（1991～2006年）16年間のM結合とW結合を調査し、量と方向性を図示できる通時散布図を作成して、「メール」のM結合・W結合の16年間の遷移パターンと両者の関係を定量的に考察した。生産性を考慮し、年ごとの初出の結合相手を調査した散布図との遷移パターンを比較した結果、M結合とW結合とは、単調な増加ではなく、停滞と増加を繰り返す遷移パターンを見せた。インターネットの発達、携帯電話のメール使用、世相と関連した話題性などを反映して、新しい句と複合語が爆発的に増加する時期が見られたが、特に句の増加がより目立った。また、16年間で停滞と増加を繰り返す中で、非主要部ではW結合の増加が、主要部ではM結合の増加が目立った。M結合とW結合の共通共起語基の16年間の遷移をみると、M結合が先行して出現する場合（「インターネットメール」と「インターネットのメール」）、W結合が先行して出現する場合（「携帯電話のメール」「携帯電話メール」）、ほぼ同時期に出現する場合（「パソコンメール」と「パソコンのメール」）があった。特に「インターネットのメール」は、散布図で大幅な増加を見せた06年には使用例がなく、予想できるのは、携帯電話からのインターネットを経由したメールの使用が普通になり、インターネットという概念を修飾語として使わなくなったからではないかと考えられた。どちらが先に出現するか、だけではなく、中には消えていくか、どちらかに定着していくかなどの、M結合とW結合の遷移の中で実にさまざまな現象がみられる。これらの関係については今後、より詳細に分析・検討する必要がある。

結論では、各章のまとめと、今後の課題について述べた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (KIM JUYOUNG)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 石 井 正 彦 副 査 大阪大学 教授 洪 谷 勝 己 副 査 大阪大学 教授 青 木 直 子
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 形態素の結合用法（語構成）と自立用法（句構成）

学位申請者 KIM JUYOUNG

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	石井正彦
副査	大阪大学教授	渋谷勝己
副査	大阪大学教授	青木直子

【論文内容の要旨】

本論文は、現代の新聞に使われた外来語系語基を対象に、その結合用法（語構成）と自立用法（句構成）の量的実態を調査し、両者の関係を共時的・通時的に明らかにすることを目的として、その方法論の開発と理論化を試みた研究である。論文の本体は、序論・本論3章・結論から構成され、他に参考文献と付表2種を付する。全体の分量は、A4判159頁、400字詰め原稿用紙換算約570枚である。

序論では、本論文の目的と研究対象、調査資料、研究の方法について述べる。研究方法については、従来の派生研究論とは異なる立場から、形態素（語基）による自立用法と結合用法とを、語基のもつ同じ結合力の異なる現象面ととらえ、両者を同列に並べて比較する必要性を主張する。具体的には、国立国語研究所によって考案された「連接率」の問題点を批判的に検討した上で、結合用法を語基による「語構成」（例：「メール送信」）、自立用法を語基による「句構成」（例：「メールを送信する」）ととらえ直し、それぞれを「M結合」「W結合」と呼んで、両者の量的関係を、結合相手となる形態素の異なり語数で計測し、比較対照する新たな方法を提案する。

第1章では、外来語系語基の結合用法と自立用法との関係を、主に量的な側面から共時的に調査・考察する。2006年の『毎日新聞』全紙面の記事本文に現れた外来語系語基上位50種を対象とし、それらが漢語および外来語の語基と共起してつくるM結合・W結合を異なりでカウントし、両者の関係を、注目した外来語系語基が主要部になる場合と非主要部になる場合とに分けて、相関係数・共起語基の共通度・差異係数の三つの指標において検討する。その結果として、非主要部用法ではM結合とW結合との間に強い正の相関関係が認められるが、主要部用法では明確な相関関係は認められないこと、結合相手の共通度も非主要部用法の方が主要部用法より大きいこと、また、非主要部用法ではW結合がM結合より多いが、主要部用法ではその逆の結果となることなどから、対象とした外来語系語基は、非主要部になる場合にはM結合とW結合との間に「構文的な語形成」の傾向を、主要部になる場合には「命名的な語形成」の傾向をもつことを明らかにする。

第2章では、上記の調査結果のうち、非主要部・主要部の両方でM結合・W結合の数に有意差が認められた語基を、(1)非主要部・主要部の両方でM結合が多いもの、(2)非主要部・主要部の両方でW結合が多いもの、(3)非主要部ではW結合が、主要部ではM結合が多いものに分け、それぞれの類型の特徴を明らかにする。その過程で、多義の語基では、意味によってM結合とW結合の様相が異なる場合があること、動名詞語基は、非主要部でも主

要部でもW結合になりやすく、M結合にはなりにくいこと、組織や主体を表す語基には、主要部では名付け的でM結合になりやすく、非主要部ではW結合になりやすいものが多いこと、などを明らかにする。

第3章では、主要部用法でも非主要部用法でも結合相手（共起語基）の類似度が高い語基「メール」を対象に、『毎日新聞』16年分のM結合とW結合を調査し、それぞれの遷移パターンを図示できる通時散布図を考案・作成して、両者の関係を通時的に考察する。その結果として、M結合とW結合とは、単調な変動ではなく、停滞と増加を繰り返す遷移パターンを見せること、そうした変動には、携帯電話のメール使用など、言語外的な側面が影響すること、また、調査期間の全般を通して、非主要部ではW結合の、主要部ではM結合の増加が目立つこと、さらに、共通する結合相手の出現時期をみると、M結合が先行する場合（「インターネットメール」→「インターネットのメール」）、W結合が先行する場合（「携帯電話のメール」→「携帯電話メール」）、ほぼ同時期に出現する場合（「パソコンメール」「パソコンのメール」）があること、などを明らかにする。

結論では、各章のまとめと、今後の課題について述べる。

【論文審査の結果の要旨】

従来の派生形態論では、文形成・語形成の基本的単位である「形態素」を、原則として、自立して単語になり、かつ、結合して単語（合成語）の要素にもなり得る「語基」と、単語の要素にしかたない「接辞」とに峻別し、主として、両者の違い、および、ある形態素がそのいずれであるかといったことを問題にしてきた。しかし、一つの語基にあって、その自立して単語となる側面・能力と、他の形態素と結合して単語をつくるという側面・能力とがどのような関係にあるのかという問題については、語基の一般的な性質としても、個別の語基の特徴としても、詳しく検討されたことがない。その理由は、語基の自立用法を「そのまま単語として使われる」という「自立」の側面に限定し、「文中で他の単語と結合して句を構成する」という「結合」の側面を排除してしまったために、形態素としての結合用法は形態論（語構成論）で、自立後の単語としての結合用法は構文論で扱うという分業が当然視され、両者を同じ「語基の結合力」として関連づける意義・必然性が顧慮されなかったからである。

本論文は、こうした形態論の「常識」がもつ問題点を明らかにし、語基の性質を十全に記述・解明するには、その結合用法を「語構成（M結合）」、自立用法を「句構成（W結合）」ととらえ直し、両者を同一語基の機能として関係づけることが必要であると主張するもので、形態素の機能研究に新たな視座を提供したといえる。また、その方法論の点でも、この問題に唯一取り組んだ国立国語研究所の（延べの使用頻度に基づく）「連接率」の考え方を批判し、両者の関係を「いくつの異なる形態素と結合するか」という共通の観点から計測・比較する手法を開発したことは、計量的な言語研究としても画期的な成果である。さらに、その手法に基づいて、新聞コーパスを利用した大規模な語彙調査を行い、数多くの外来語系語基について、M結合とW結合との共時的・通時的な関係を、適切な統計手法とともに記述したことは、上記の視座や方法論の妥当性を実証したものと見える。

ただし、本論文には、克服すべき課題も少なからず残されている。M結合において語彙的なものと統語的なものが区別されていないこと、W結合にM結合と比較する必然性のない雑多なものが含まれていること、語基の同語異語判別や品詞性の認定などに不十分な点を残すこと、外来語系語基に限定する必然性が弱く、和語系・漢語系語基が扱われていないこと、データの提示にとどまって個別の語基の特徴が十分に明らかにされていないこと、M結合とW結合との比較に語基間の文法関係を限定するなどの工夫が求められること、などである。

とはいえ、本論文が、語基における結合用法と自立用法との関係づけを理論化し、両者を計量するための新たな方法論を提示することによって、語構成と句構成とを関連づける新領域を開拓したことは明らかであり、上の課題もその価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。